

一般教育への期待 —総合科目の経験から—

中谷陽二
社会医学系教授

基礎科目に含まれる総合科目の経験から、1, 2年生の一般教育のあり方について私見を述べたい。私がオーガナイザーを務める「脳と行動と社会」は医学専門学群が開設する総合科目の一つで、社会医学系精神衛生学、臨床医学系精神医学、他の学系、さらに学外からの先生方に講師をお願いしている。240名の定員を超える受講希望者があり、所属はさまざまであるが、医学の学生は少数で、第二学群の人間、生物、比較文化の学類の学生が多い。つまり、脳と行動に興味のある医学以外の学生が主として受講している。授業内容は、脳の構造と機能、無意識の世界、ストレスと生体、精神療法・芸術療法、犯罪者と被害者の心理、自殺の原因と予防、家族の病理、民俗と宗教など、人間行動を物質レベルから社会文化レベルまでの幅広い視野で解説することを目標にしている。最先端のニューロサイエンスに始まり、インタ

ネット依存症、音楽と癒し、トラウマのケアなど、今日的なトピックスを織り交ぜ、「人間とは何か」について考えるきっかけを与えるように構成している。精神医学と人文社会科学の境界をカバーする学際的なメニューが特色である。

重いテーマを投げかける

大人数の授業であるため受講生との対話はむずかしいのであるが、学期末の試験がある程度その代替手段になっている。試験は論述式で、各学期の授業の中から特に印象の残ったものについて自由に意見や感想を記す項目を加えている。250人の答案は、目を通すのが一仕事であるが、学生の意識と関心の所在をうかがう媒体でもある。ノートの引き写しという没主体的な答案がある一方で、読み応えのある力作の解答もけっして少なくない。昨今の若者は日本語の文章を書くこともおぼつかないと思っていたが、自

分を表現しようという意欲は感じられ、また危惧したほど活字離れているわけでもない。

自由記述の答案を一種のアンケートとして読み、受講の動機を推測すると、ニューロサイエンスへの科学的興味とならんで、こころの問題について、いわば我が身に引き寄せた切実な関心を持つ学生が少なくないように見受けられる。たとえば、アパシーに苦しんだ経験を持つ学生や、引きこもりの友人にどう接すればよいのか悩む学生がいる。彼らには精神療法、音楽療法などの授業が特にアピールする。「癒し志向」とも言うべき傾向のあることがうかがわれる。

もう一つ気づかれた点は、彼らなりに社会の動きを敏感にとらえていることである。一例をあげると、少年犯罪が継続し、少年法改正論議が盛んな頃の試験で、「厳罰化」すなわち刑罰を重くすることによって少年犯罪を減らすことができる、という考え方があった。これについて自由で意見を述べよ」という問題を出した。実はあまり反応を期待していなかったのであるが、蓋を開けてみると手応えはかなりのもので、解答スペースをはみ出す答案もいくつかあった。「非行少年なのだから厳罰が当然だ」といった突き放した意見が多いように予想してい

たが、実際はむしろ厳罰化に反対であるか、反対でないにしても実効性に懐疑的な考えが多数であった。年代的に身近に感じられることもあろうが、問題を起こす少年たちを理解しようとし、形式的な法律の手直しで対処することに疑問を向ける姿勢が見られた。

手前味噌になるが、私自身は授業の一つに「極限状況と人間」というテーマを取り上げている。さまざまな極限状況への人間の反応について触れ、第二次大戦でのホロコーストを本題にしている。ユダヤ人の精神療法家フランクルの著書『夜と霧』をテキストにして、苛酷な強制収容所生活での人間の心理と行動について解説する。キーフレーズは「異常な状況においては異常な反応がまさに正常な行動である」というフランクルの言葉である。フランクルが収容された南ドイツのダッハウ収容所を以前見学する機会があり、そのときに写したスライドが視覚教材として役立っている。蚕棚のようなベッド、入り口に「シャワー室」という偽の標識をかけたガス室、死体焼却炉など、生々しい情景を見てもらう。現在のダッハウ収容所はバイエルン州により記念館として復元されたもので、大学生のボランティアらしき青年が外国からの見学者向けに英語のガイドを務め、日

本語のパンフレットまで用意されている。このように過去の国家的犯罪の跡を公的施設として保存し、オープンにしているドイツ流の戦争責任の取り方についても授業でコメントしている（もっとも最近読んだ本によると、ダッハウ記念館はドイツ人の主体的意志よりも各国の元収容者の圧力によって開設されたというのが事実で、その点コメントを修整しなければならない）。この授業についての感想をみると、非日常的な状況への反応、たとえば収容所からの解放が喜びよりも感情喪失をもたらすといった現象が興味を引いている。残念ながらホロコーストは遠い過去の出来事として受け取られるようで、高校の歴史の授業で教わらないことがその理由かも知れない。それでも、こうした暗く重いテーマは、ベトナム戦争すら知らない世代の学生が、アニメではなく現実の世界に起きた戦争について想像をめぐらすきっかけになると考えている。

一般教育の目指すところ

“オタク”や“自己チュー”という言葉に象徴されるように、社会や他人に背を向け、自己愛的な殻にこもり、もっぱらパソコンのチャットでコミュニケーションを維持しているのが典型的な現代

の青年と思われている。本学に赴任するまで学生と接しなかった私自身、そのようなイメージを思い描いていた。しかしこうした青年像は多分にメディアが作り上げたステレオタイプのように思われる。また、アパシーや社会的引きこもりなどの社会病理現象が過度に一般化される結果でもあるだろう。かりにそのような傾向があるにせよ、軽さを旨とする消費社会、情報社会の一面がその土壌になっていると言える。私のささやかな経験から言えば、重いテーマにもそれなりに手応えはある。重い球を投げなければ重い打球は返ってこない。問題を受け止める潜在力と可塑性を生かすのは働きかけ次第であると言える。

本学の建学の理念は、専門領域に閉じこもり、現実の社会から遊離しがちであった大学のあり方への反省に立っている。流動化し、行く先が不透明になっている現代社会において、いっそう幅広い知識と柔軟な対処能力をもつ人材が求められるだろう。そのためには大学生生活の早い時期に新鮮で多彩な刺激を提供することが必要である。本学の利点が生かされ、専門教育ばかりでなく学群の壁を越えた一般教育がさらに充実されることを期待したい。

(なかたによろじ 精神衛生学専攻)